歌川國松画
岡本貴泉編輯
芳川信雄校閲
初編下
初編中
初編上

東海橋曉天奇聞
芳川信雄校閲
初編上
金松堂梓

A540
1

思案橋

曉天奇聞

初編上之巻

岡本貴泉編輯

歌川國松画

48-8414

思案橋曉天奇聞之序

大道直ふして髪の如しとゝく。其髪一度こんがらかる時へ解べき術もなく歯の櫛いつよる結れぬ難義をば来るものとゝ知りつゝも。やはり迷ふ思案橋彼の曉天の奇聞をば。其儘題しく書出せ。談話も永岡久茂等ゲ暴挙の顚末其妻お仙ゲ烈義と後まで乱さぐる始終と委しく昨年中の有喜世の紙上へのせしと。金松堂ゲ需めよ任せ。今又少しく増補して。乎凡る筆の毛筋棒よ斯る草紙と取揃へまゝ勧懲の二道をもかゝ分御覽よ入る外れば衣以来の四貫負と。緑のかゝ掛願ふと云爾

明治十五年二月

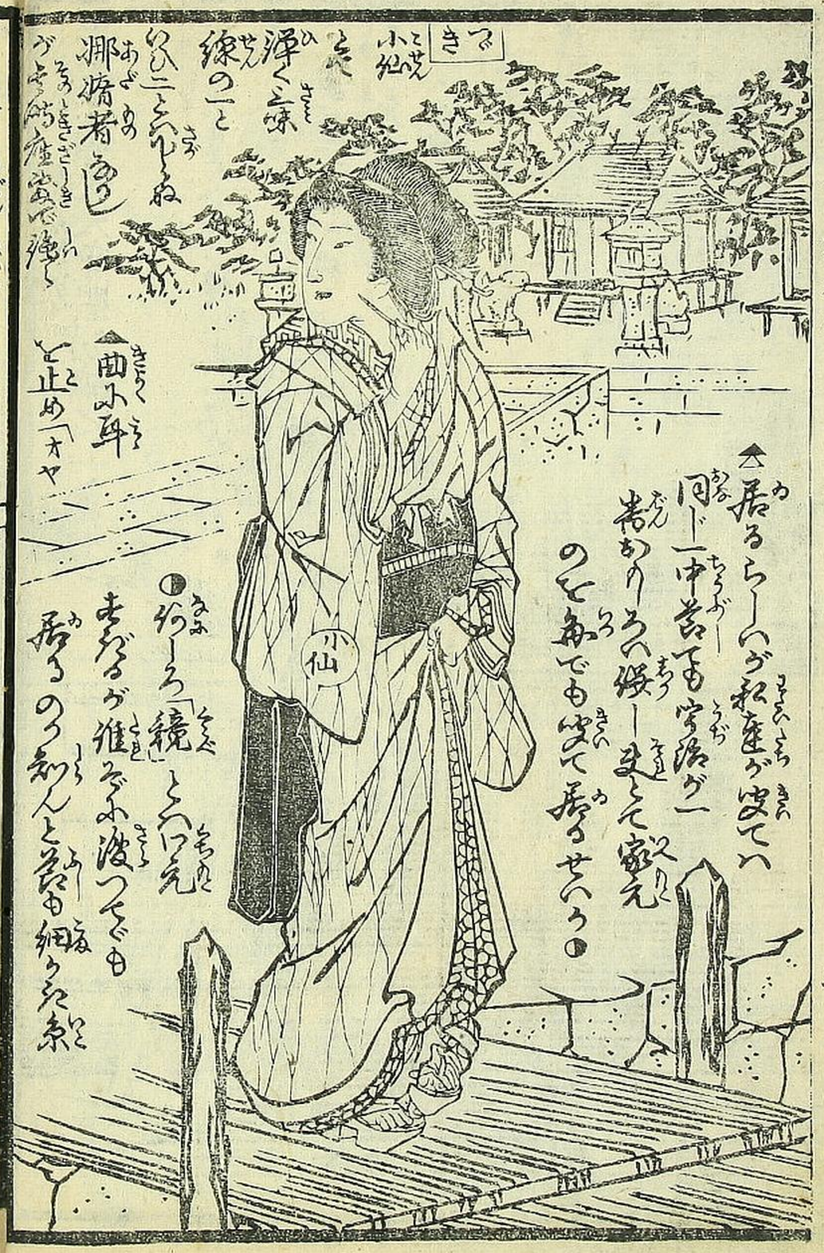
岡本貴泉述

藝妓小仙

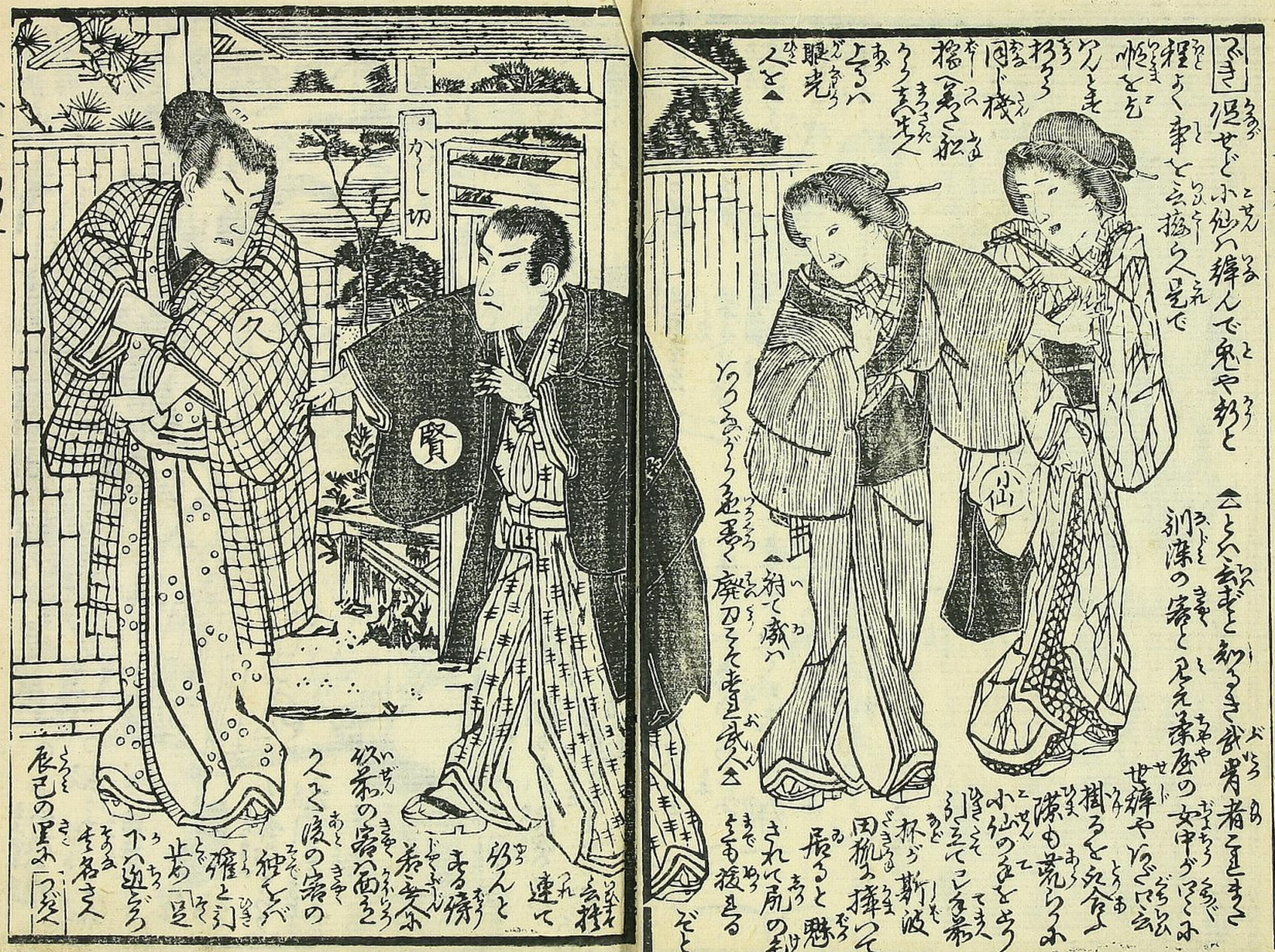
永岡久茂
前原一誠

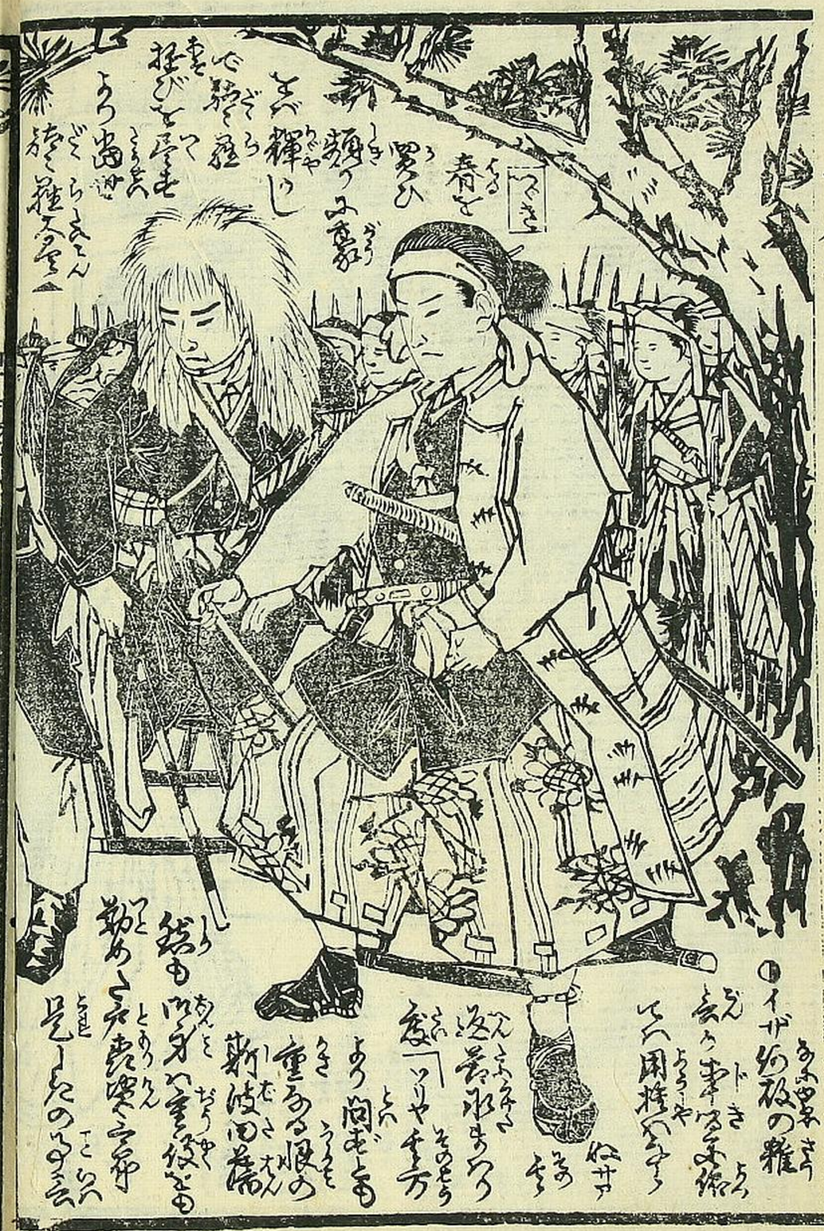
中根半七
江塚政雄

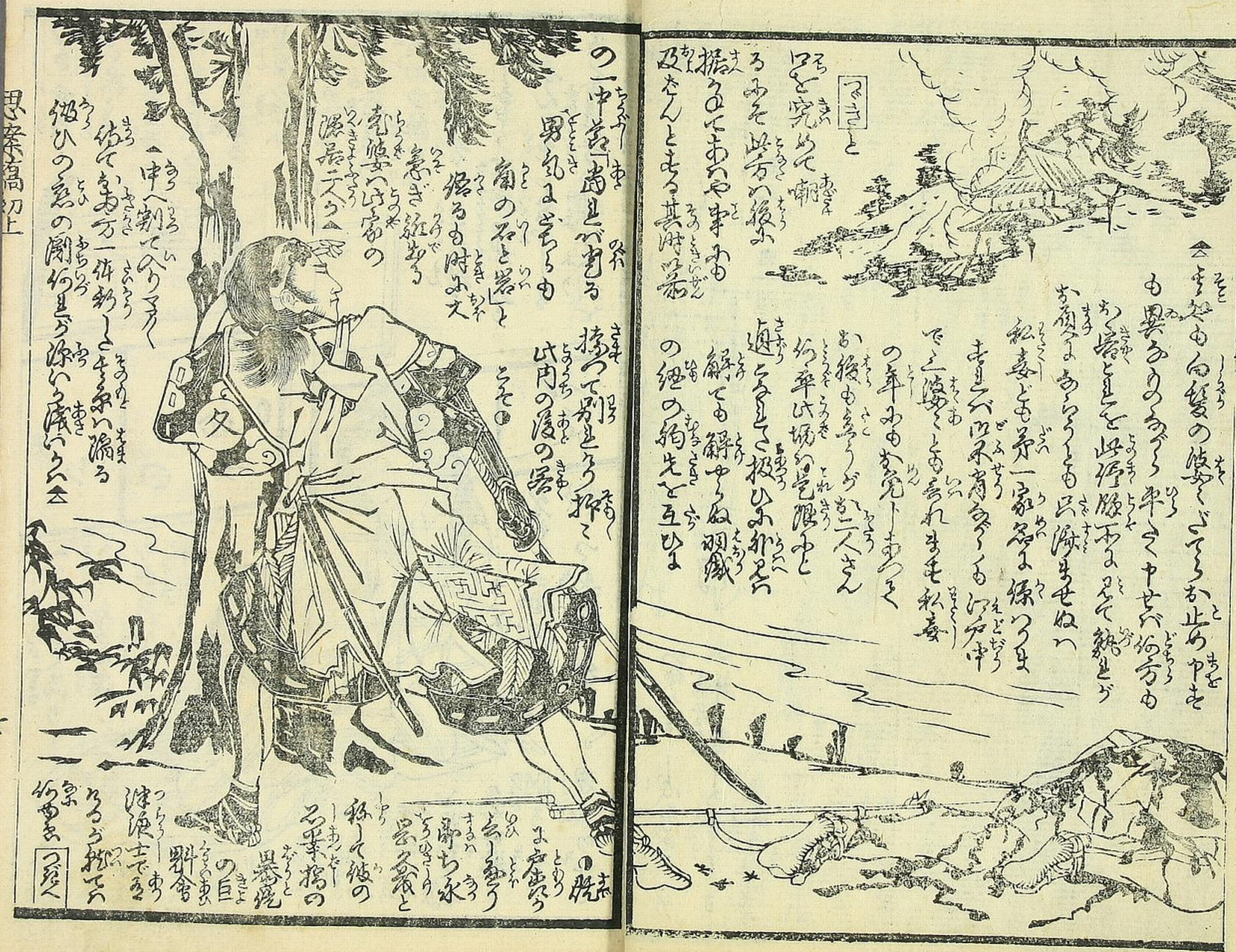
思案橋暁天竒聞初編之上
今は昔しと為まめ色
香さえ盛りの夜已
て入色源川の一地
花の墨東の紅別て
美くも太く富ヶ岡
八幡宮の境内より料
理も一さ二軒茶屋
伊勢屋と列びし其うみとう義
千代とあー松ずゞ此日も掲げー貸
切の札を除つ川岸の為く門とぶ出ー人の
艶妓い時ーも明治廿年の注目お仲町の
つぎへ


小仙

賢


賢
久
小仙





つぎと
口を究めて
ゐる内に
拵ひ
及ばんとする其時
の一中黄
男気よ
南の石と岩と
絡るも
急ぎ紅
老婆
源義
中へ割て
結て
俤ひの
の
漁夫
野舎
の
つ

つゞき

小仙
蝶
ちよ

地本錦繪問屋

高橋阿傳夜叉譚　初編
國定忠次…
木錦隅田螺
格蘭氏傳倭文賞
綾重衣紋適春料
茗廣澤邊沸
脱線心三俣
總角場花王夜嵐

010190514175

岡本貴泉編輯
初編中

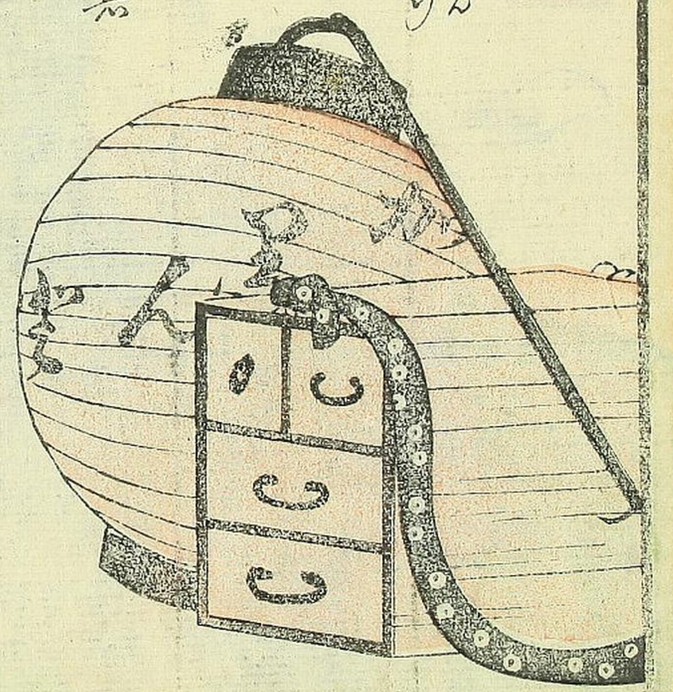
A820
2

恩賞橋
曉天亭竹

初編

中の巻

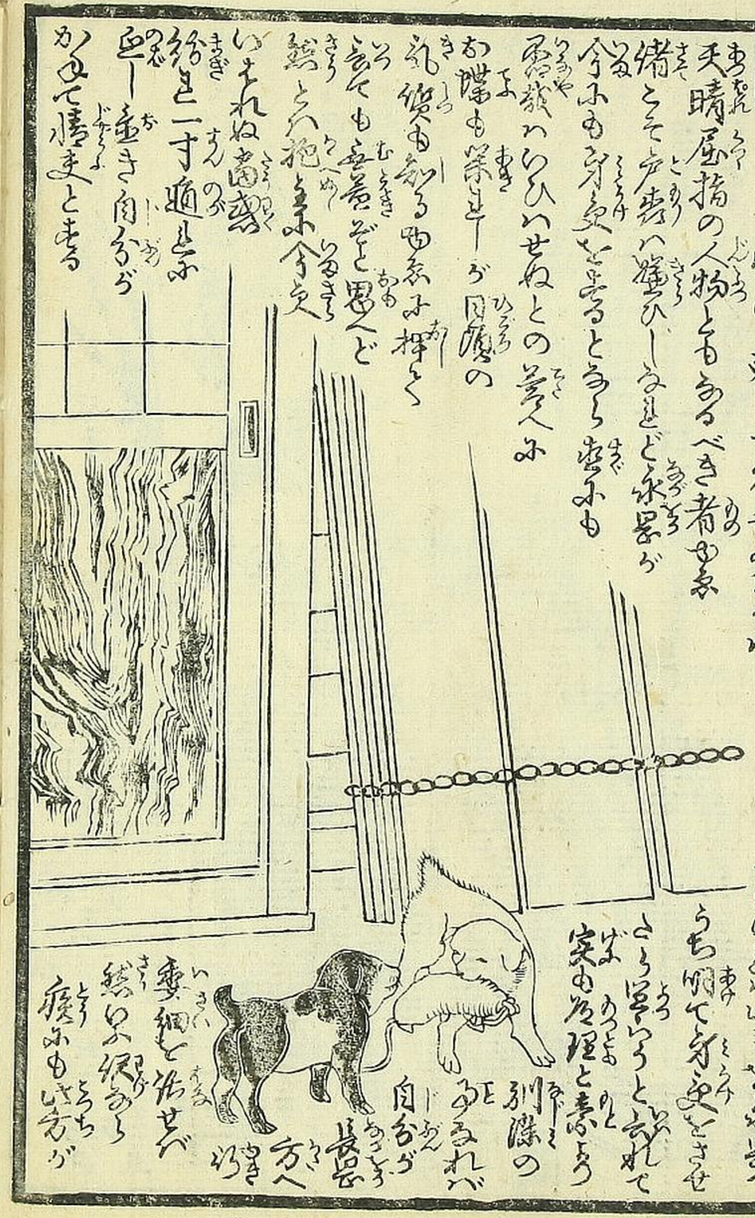
芳川春濤閣
國本起泉共
歌川國松画
金松堂板



48-8415

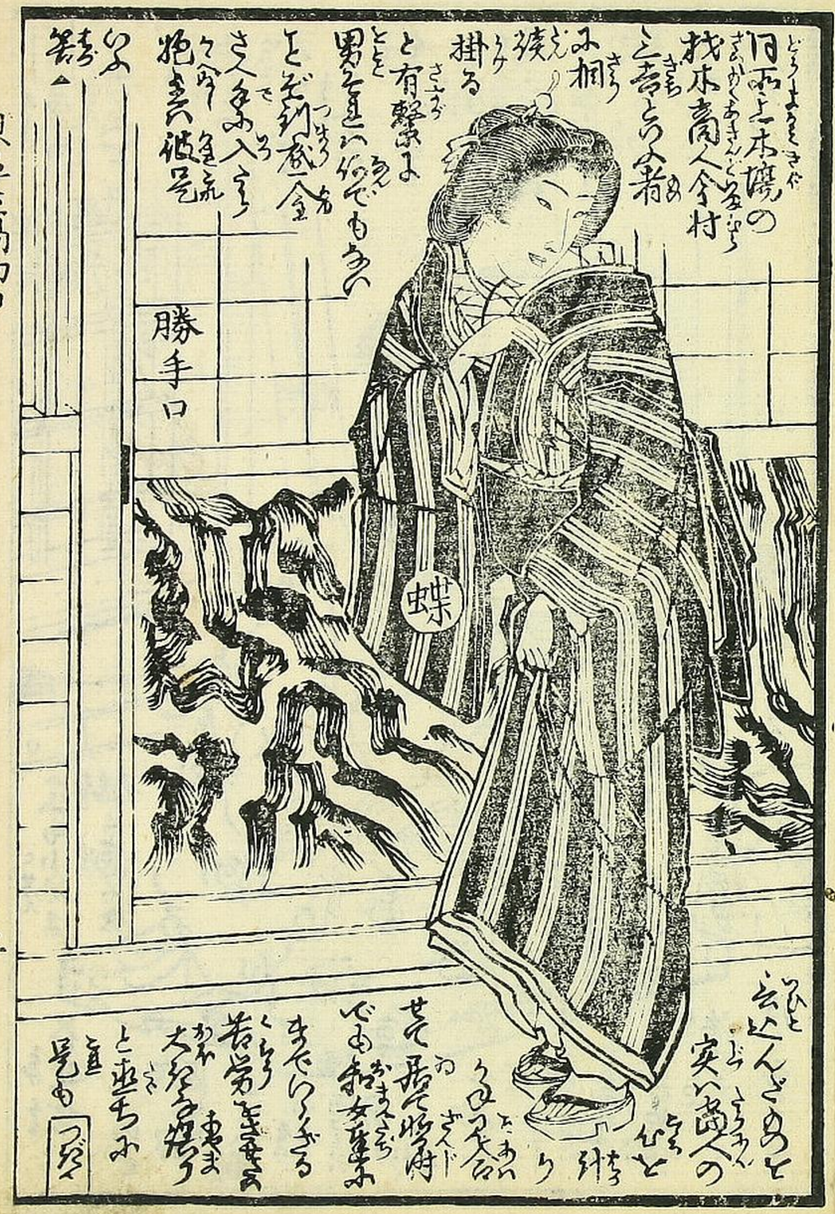
つぎ

あまりどは情浄く殘る一度世の出るべ
天晴屋指の人物ともあるべき者も
緒とて戸歩へ雑ひしるとど永居ば
今ふも可笑とまるとあら安ふも
屠蘇いらひいせねとの美人み
お懸も繁りとーゞ日暖の
乳貌も知るゆ糸み押さく
こて也安ぞと思へど
鏡とへ抱き不今夫
いまれぬ面白
紛と一寸通とふ
色ー垂き自分ば
くゞて情まとまる



一あの見べ代事と永吳へ
うち明て分夫とさせ
さう吳いうと云れて
実も尾理と素ふ
別深の
みれば
自分ば
長吳
方へ
変細と作せば
結ひ紙ふら
疲ふもせ分ば

同西上本橋の
找本高人今村
こ者とう者
み桐
猿
掛る
と有繁よ
男之是いなでも多
とぞ利益金
さ人多み入
抱美彼呂
勝手口



伝ひんざあと
実い面への
ひと
引
り
久ひ天合
せて長て呼用
で和女華み
きでいくぎる
若労を
大分多
と亜ちみ
直
見も
つぎ

つゞき 更めて身の文を書くと捲き込んでゐるも手金八百円とこの場合でも行かるゝとの事

▲みもふ仙子を酷く書る▲

又

▲のゝ様さ悲さ男激さえ

▼逆書

さんあと藤を望ぬそ八幡の手の朝倉うも家の行ラー功殺生一うゞ弟明治五年の九月

方で千円出さうと言さのあれば是ぞみまくでハ決して家敷せぬとらへ程よ元来気甲の永吉へ見せ舒媚見元

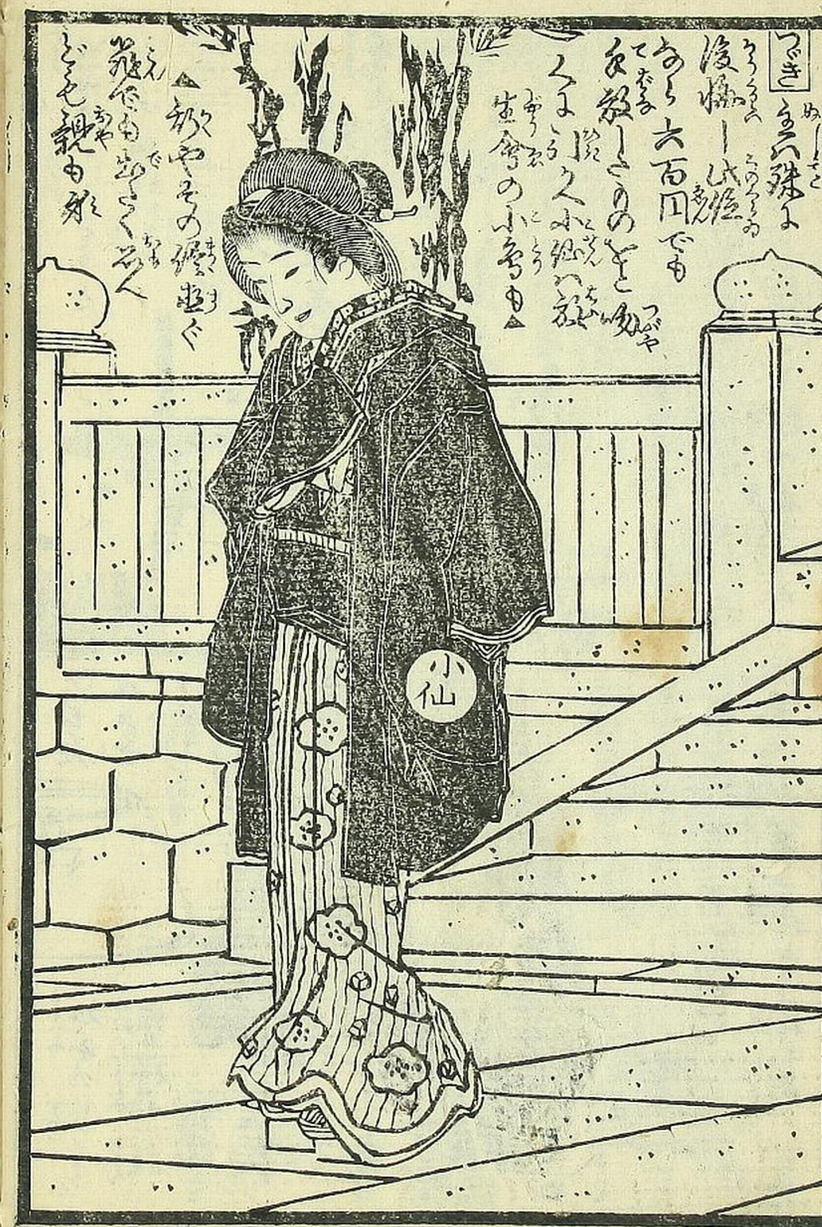
▼をそれでまるあるん悟さも悟しと思つさのく暁づくでも張倫づくでも行ぬハ金ゆえ接而みく云ふとかげ責てのゝ永六百円で不肖をあらうゞを打てと頼めど中く肯へ是ぞ引きらうゞも絶対八勝ある掌の上ハ

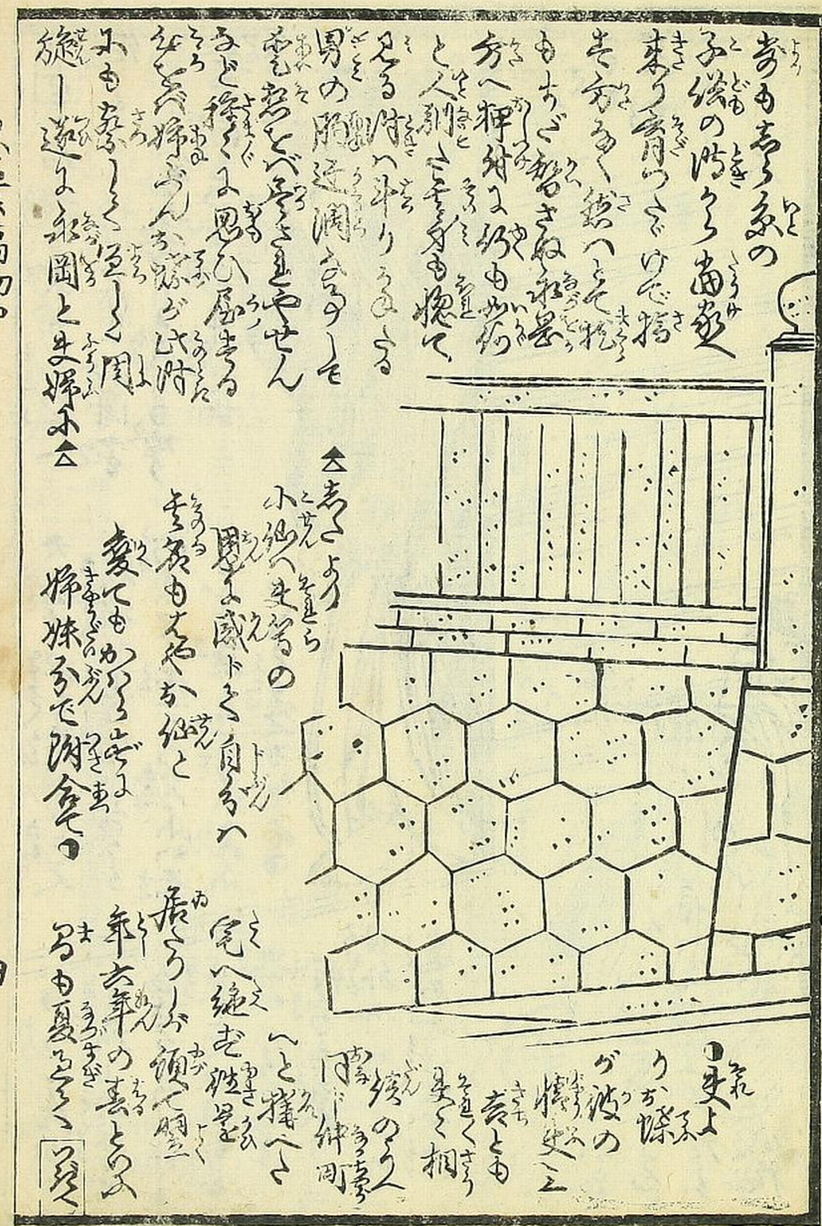
▼付け意地ハ

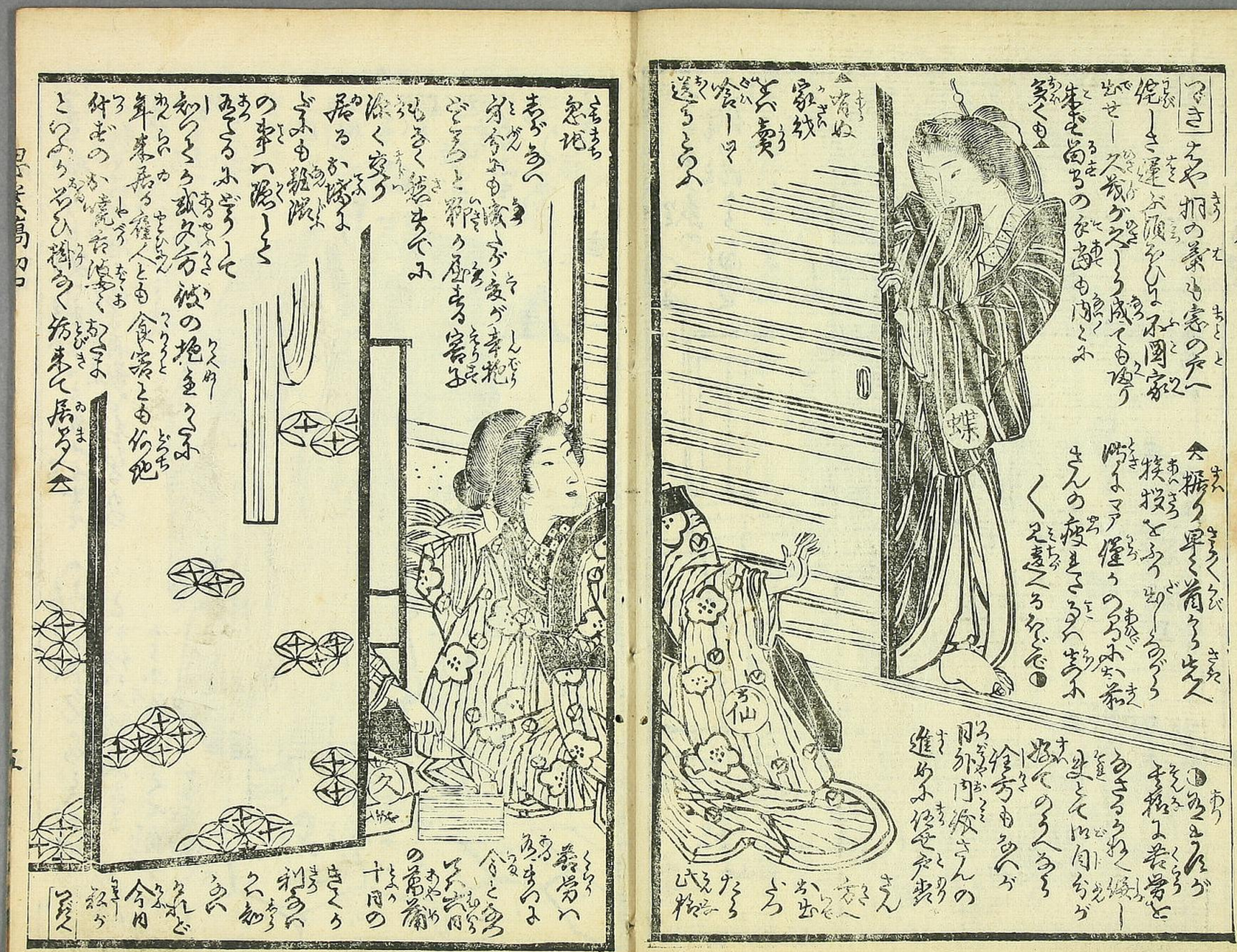
るハ気の考今ハ二筋も接探の糸を接まで永吉永くも深ひ▼

中

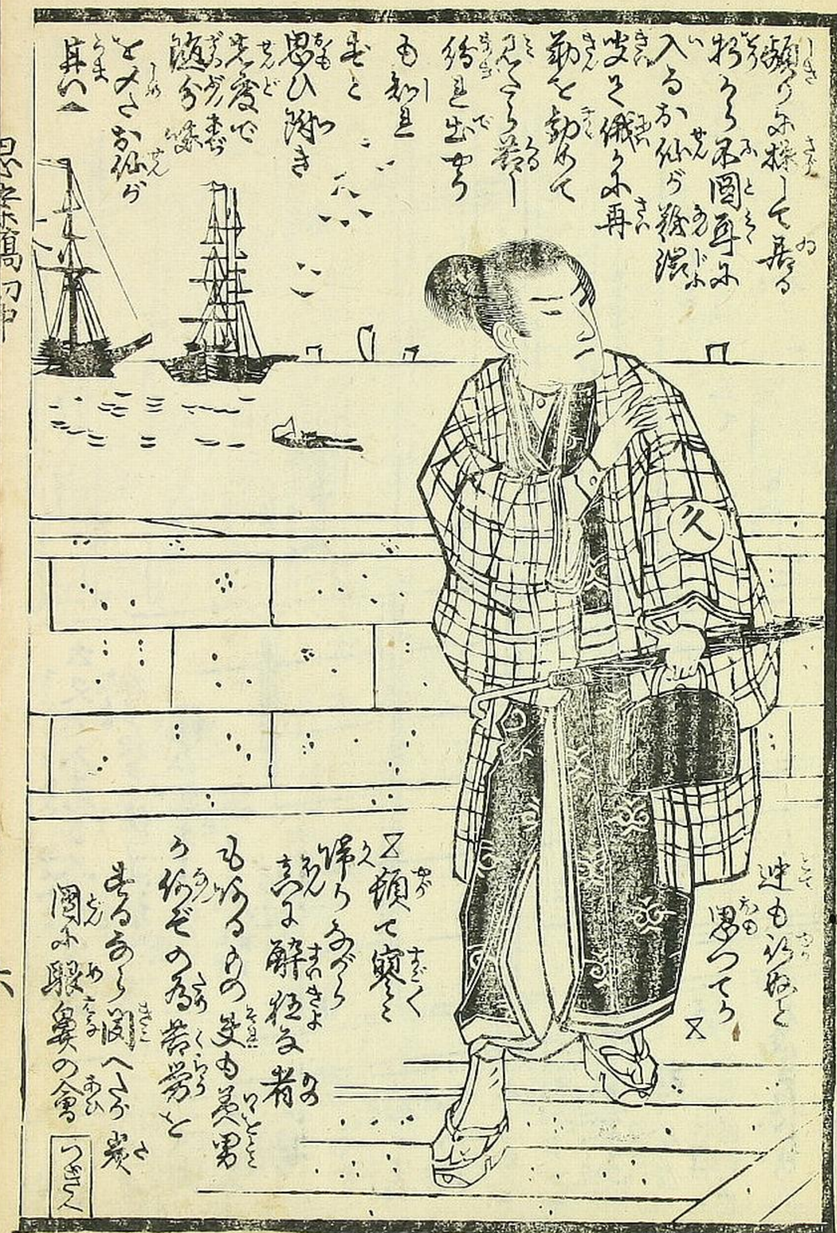
知その筋ゝ芸妓一般解放と人ハ今赤ゝる者の特合出し絶


小仙

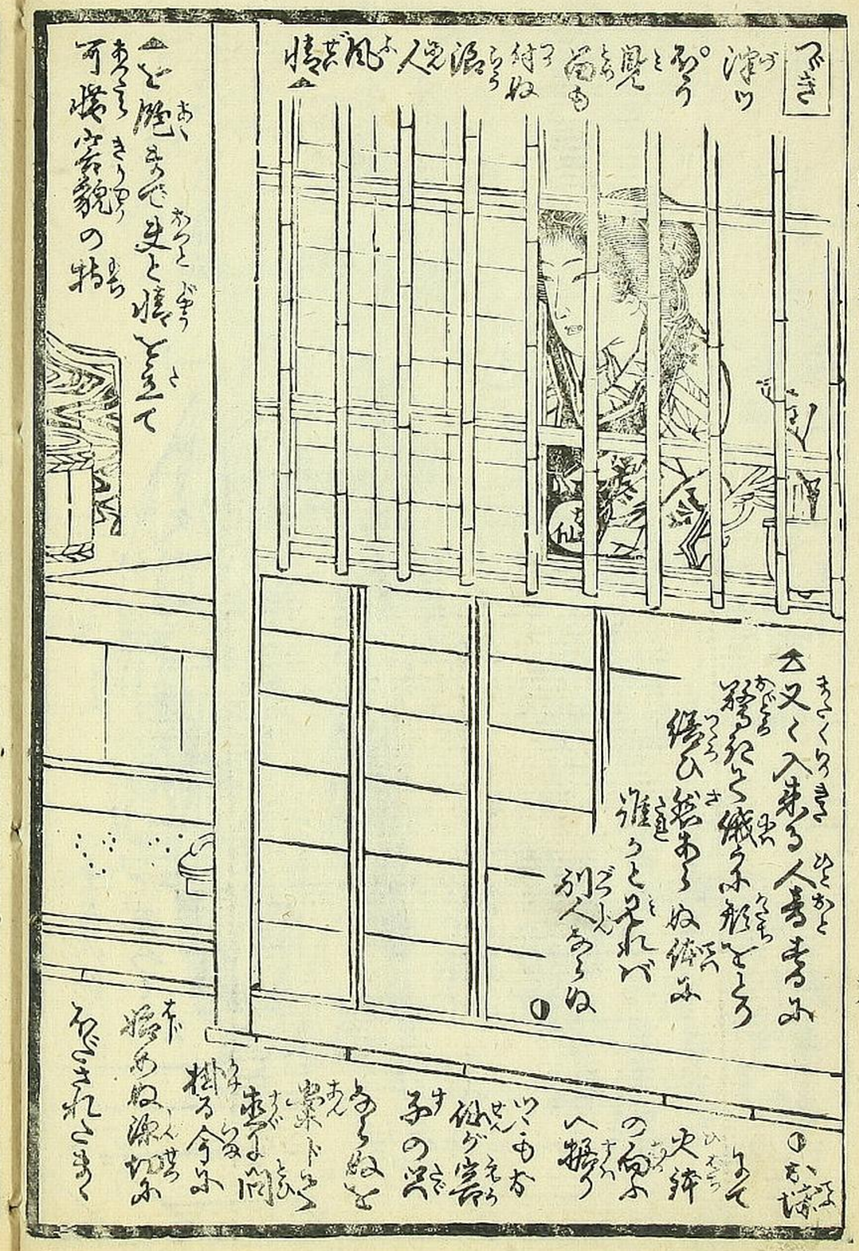



蝶
仙

つゞき
前
山亜の譯
後より分る


久
つゞき

つゞき



△又く入来る人者者ゑみ
経ゐたる紙ゑふ形をとり
繰ひ給あるぬ体み
進うとすれば
別人あるぬ

△ど隠れ出て是と情と立て
可愛容貌の特

△実ハ彩くゑく
ありと有るも
ども活る
せ
た
お嬢

△濁息吐き考へ
悪い時ハ悪いもの
お茶も若りゑ
若男の中ハ此様な
ものと考ふるゑ分けハ惜く仏細くもある
猛の入相者る手ハ八名平吉伝る者も
ゑと思へば猶ゑ元今ゑ泣伏しさ生く
惜くゑ涙を拭ひもせざゑゑ時しも

△婦人者者ゑ者ゑ私もお茶ゑ知
ての通り別ゑ祝物とそもゑく
便るハ、さん只一人ゑ母ゑ彼

つゞき

人が目外中動尚さをて
長く濱田を見
みくさう為を
向へも見迎で
成糸が叶ひ
彼見せるうち
為又さえが死ぐ
海をば相續し
一軒の母形
とあつてくう
も私へ義
向き出入もし
を内ゑまぐ笠

今度大きな
蕾清方を
文員さ知
考遠ひし
て大傷五
挨と茶さ
四条外代
浪りをして
さも逸消
みくあつて
居ゆよさ人
困る場合の
機会を多く

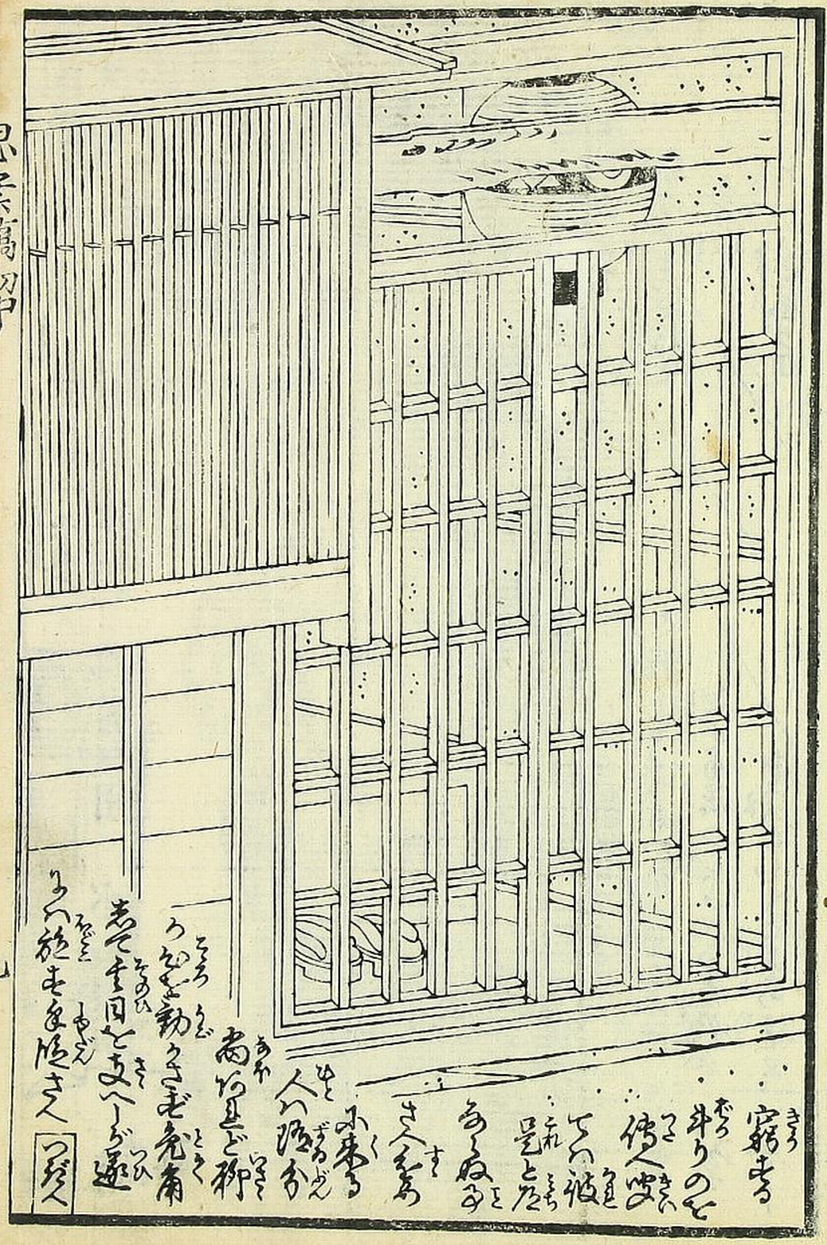
さまべ義清宅へ
入をやうと云さを
私が脇まで
車ひ上て矣
泥今まで乗りみて
長く長ろとらてさので
外仲が自滑よ為ろて
くくハ三さんの世話で今月
さも他の不自由なくるこ
さ知三さんハ迎頂庵向ゲ
裏微しこので鶴ろ出し
彼の見のとを出をると
挨ざろ縫らさ考上み

こゝを今とるう
便つたハ外ぬと私の
方へ来て不消ていハ日も長い
乙世ぬ長がうと云て今さう
私とて再勧きるのハ雲ご

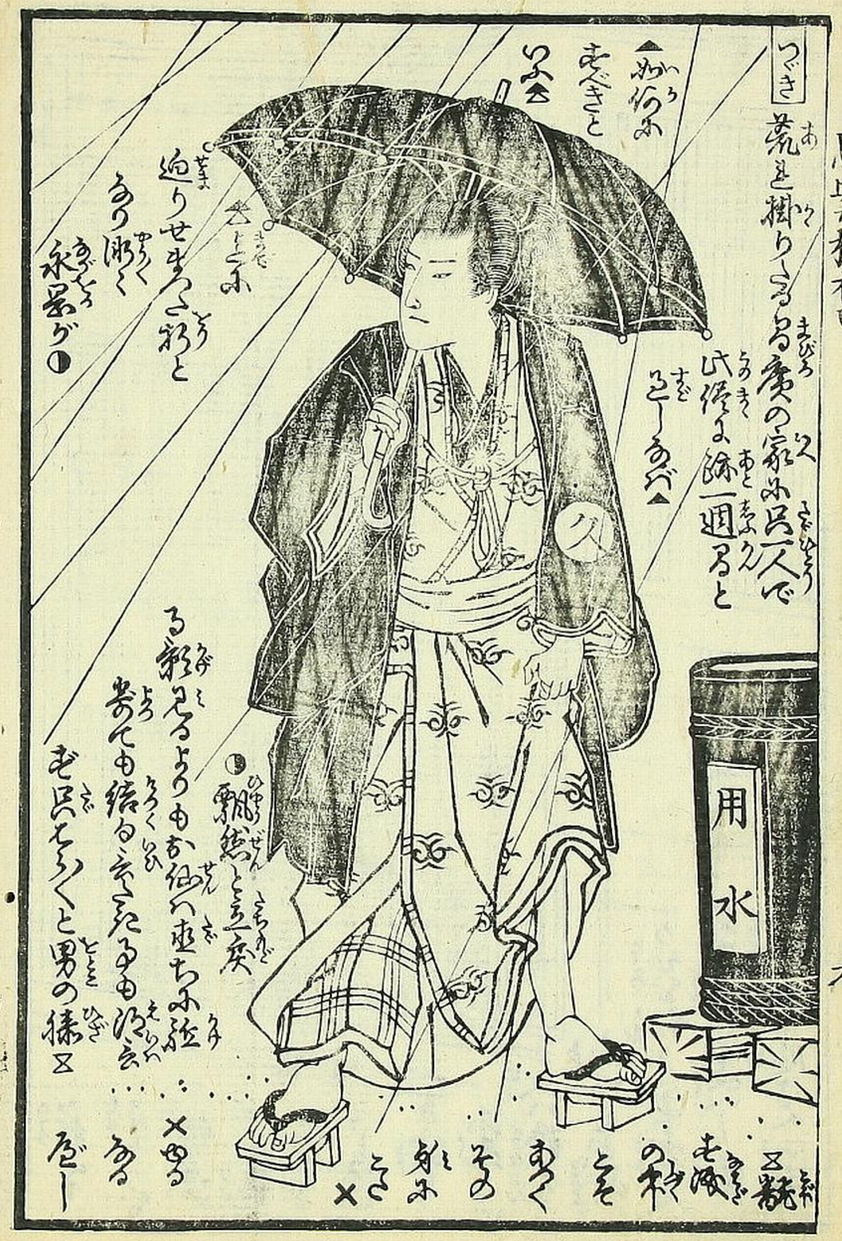
ぶき

くゝかしも分限の暦外なる門余知の
知なの五地へ沼元級ゆり仕度とゆゝ幸ひ
苦己門へ汁粉屋の居接ぐゆて義皆俗
まう生る気人のゆゝと世俗して呉る人ゞ
知るゆ家然まる様ゝ小実八赤接も物く
上手帳乞又者さのぐゞか弟も手粉沢
ゆゝべ比家をたんで私と一所よ知ていい
知ゞさうゞ初ゆと
動ある知八
先朝の人

▲婆ゞ類ひ又有ねども丈ゞ八留
ち紙者さとゆゝ知てゞ立牧と
ゆゝよゝ手青打叩けゝるとお嬢も
押ゝ動ゆる結ゝべ舎く切迫者ゝ
何用でも御法ゝ来るゆゝみと云家
を寄人さ別ゞしゞ丈ゝ法も
皆くゝど永呆八



窮屈
斗りの
俗人空
ゝ知
呆と
ゆゝ
さ人ゞ
小来る
人八法ゞ
尚ゆ見ど称
ゆゝ動くさゞ光角
者ゞ手目ゞ丈ゝ遥
ゆゝ旅ゞ手法さ人



官許 朝鮮 牛肉丸

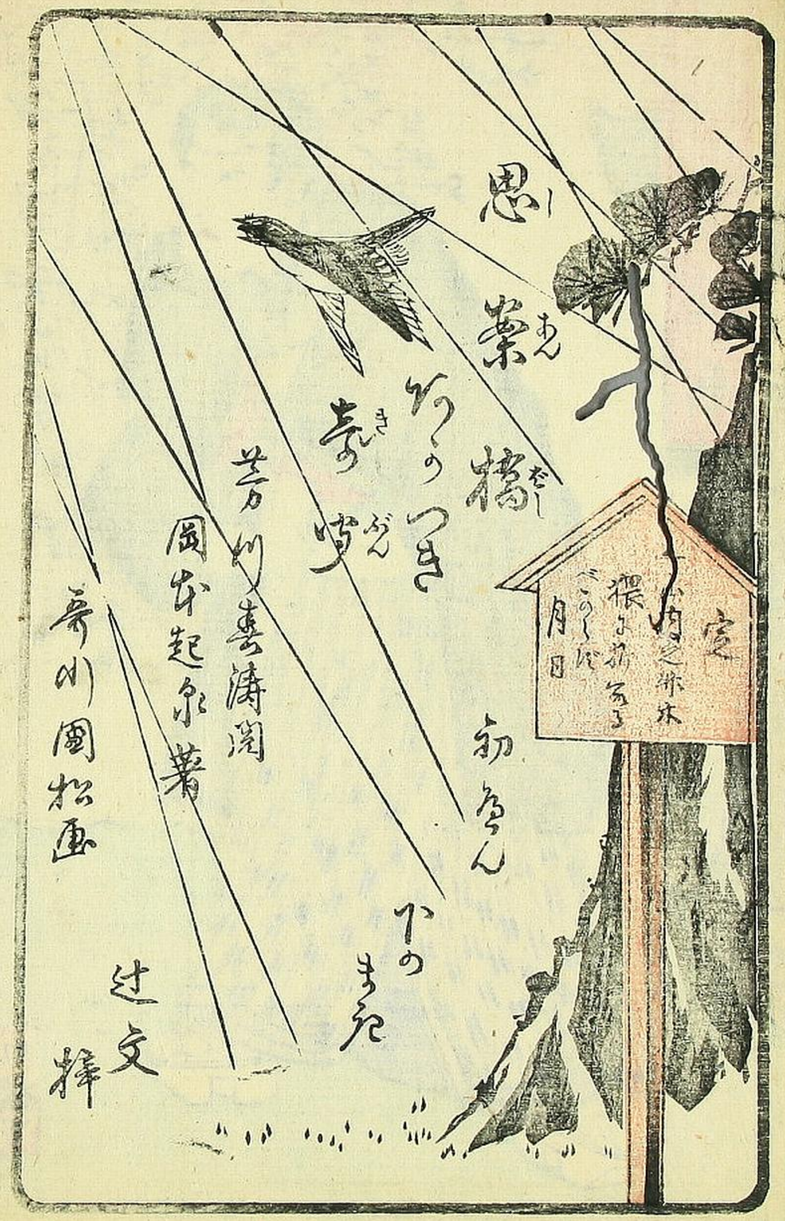
官許 天恭丸

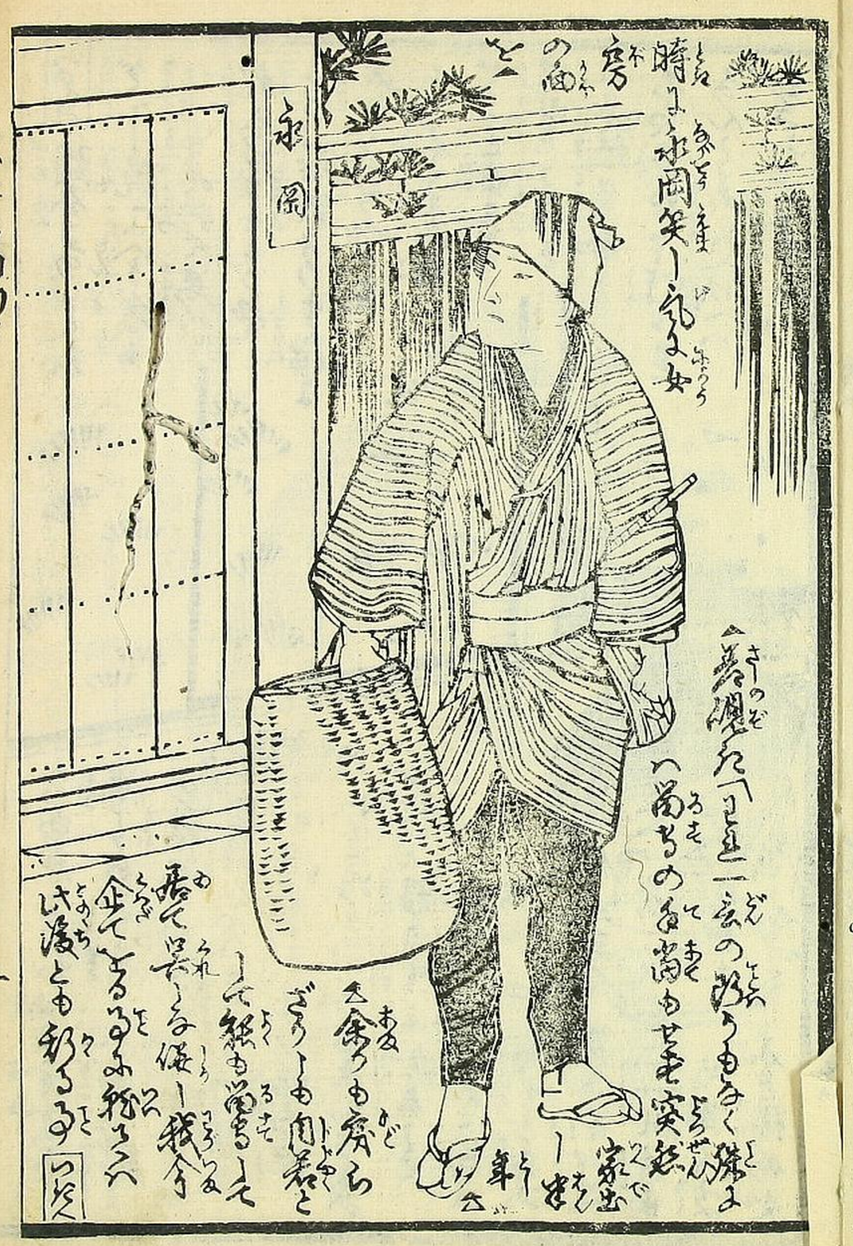
金文 出板御願 地本錦繪問屋 金松堂

010190514183

歌川國松画

A540
3





48-5416

つゞき

隨分あーと云ぐゝー說よ今度ハ
九郎生まで洗て来りし
程なるゞをとゞ泡
生て喜貌よろ生雅よ
惚く世ふゞ汝
ゝよとも水紙
せよと云ふく
有難よ采是
しゞ被見ぬく
ゝたらいとで叮ゝ是
ゝと義知人ハ
出きぬどまよゝハ

△ゝたよゝ水紙も余義ゝく
帰らめく煮て今度ハ洗く
の法ども附けて絵ゝ
ゝ水紙でハ生くの別深ゞ
ゝくて備ゝ水紙付け結ゝ仕
皆いとゝ水ふゞ水ゝて知ゝゝ
ゝ地へと縛ゝ手ゝ生ふふ
ゝさゝと洗く
自ゝゞ男ふ
胸を割ハ洗
このゝ永岡
も潔く皮
入ふ備水文

右ゝゝ家出をされ
ぬゝゝ手ゝ紙ど
掛け居
ゝるゝ
又ゝも
二月ゝ三月も
経ゝてぬ
みゝの根ゝ
ゝくへ出
ゝまる紙
ゝゞあるのゝ遠ゝ歩ゝて
ふゞ素ゝも一帰人ゞゝの云茶
ゝて我云を変ゝる紙笑ゝねべ

▲弥ゝ肯入ふる寝ゝ▲

久

仙

みゝとゝ云人ゝ
ゝ紙
ハゝ
山内
ゝ
ゝ
ゝ成ゝべくハ
ゝ通ゝと
ゝハ又自ゝ
も紙合のゝ
場所ゝ見ゝ
洗ゝて寝ゝ

つぎ

ふる里宮戸町二丁目へ早速お願の空家を求め引移りしも未だ一月に足らず須美の大門を入る寓居なるに長物浪士その名は雅也初る処の恭平一緒を指あとー拙しく交る人々熟是も当所の廻縁より居れば其の性来の便とやべきあり情長岡へ移りて のよし同藩同士の孤児とかふ 河嶋政雄と△

つゞき
半

久

つゞき

行んとする時

もやらつく舉げ

家の夫り

なりぬり

ふ

遠て

家へ入つと

出る獄人仲の

久

◐花遠ー生涯義せー仕糸の

密女双方夫とも気八△

又義

出来ぬ尚も

挑灯を今夫中へ新

辺む殺婦人寄

義される挑灯を

拾ふつもりう物とふ

義出来ぬ

陳ちまく分公

色安上る

密

書よ

を

服

早く

義

去

服

掛り婦人ゲそを

と遠ーいそ義半挑灯を

義ぐハ々と寄義を知へ仏と白濁の群と

人を永岡い集つ頻前業と云ると掛灯ー

る楽御の文保傷ゲとと◐

中遠ーんひつ

さる猫ぞあ

さら

うこ

開け

なるもの

義中長藤ふと拉出ーなぐら

密女べ二間よ長ゲ仏殺るを

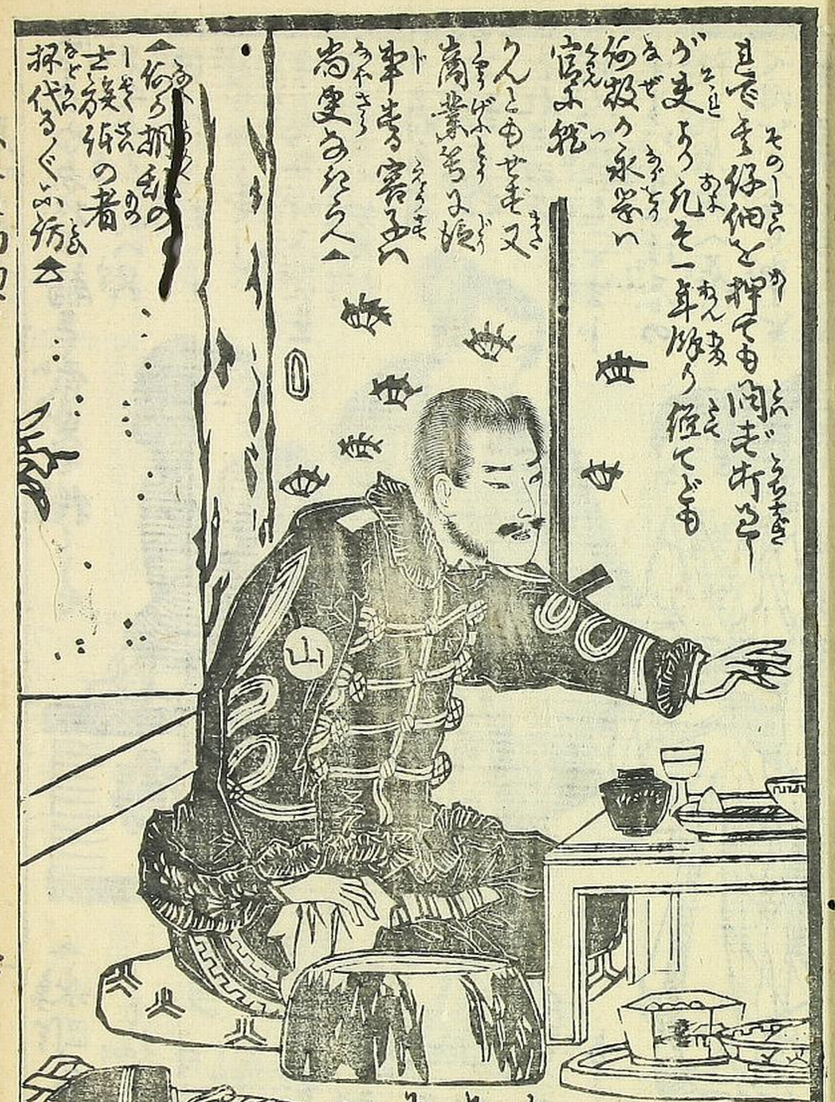
次へ

つゞき

然いさもどと若者へ手片端を拵んざまく海と
暮して逐て行く跡より婦人へ出息つき暫し
行やう[illegible]人みちゝ[illegible]も我をみ
止まりし客去の片端ゆゝと
ゆく跡てたゞゝく立
ゆつくり畢竟との
婦人と若者いめ行
ある者山て有やらん有客次編を
行く知るべし斯て永岡い出[illegible]
一向なーたるう[illegible]ぶりとゆ宅せーう
[illegible]ゆう行て[illegible]へ出立き客ふの矣
しみ行ゆ不審よ思いぬゆうねど行
ゆゝ宅よ居ゆゝ[illegible]

◆来れば無も食客と
ゆく
自づと
絵裏み
日〻の入
費客
むも見み
金とそ
い変み

且て生仔細と押ても問ぎ行ゆ
が吏ゆゝ元そ一年仮り位てゞも
行奴ゆ永岩い
客よ紙



◆行ゆ胡毛の
士族行の者
拝代るくい行◆

べるゆゝ
行ゆ
ゆべ
過て又
も宅も
ゆ行ゆ
み事の
か仕い
行ゆ
も
気ゆ
探る

つゞく

つゞき 中条村よ鰡を夢児と稱して
こゝも永岡へ只
笑ふのき〳〵
聞もやらぞして
年ゟ舎御ゟ娩し
の妻さんも役所
りゟね不審
と紀を程
されど泥く
総人へ新参を生じ
中よへ今ふ成辰の
殺さし須野へ帰り
て附を見合せ事と

▲永岡ゟしべ行ん
とも知らぬと一
日坊等く
酒宴中
又誠是
客合右
の場を
気也く
そ旦へ
ま一ふ起く
と待わ
て

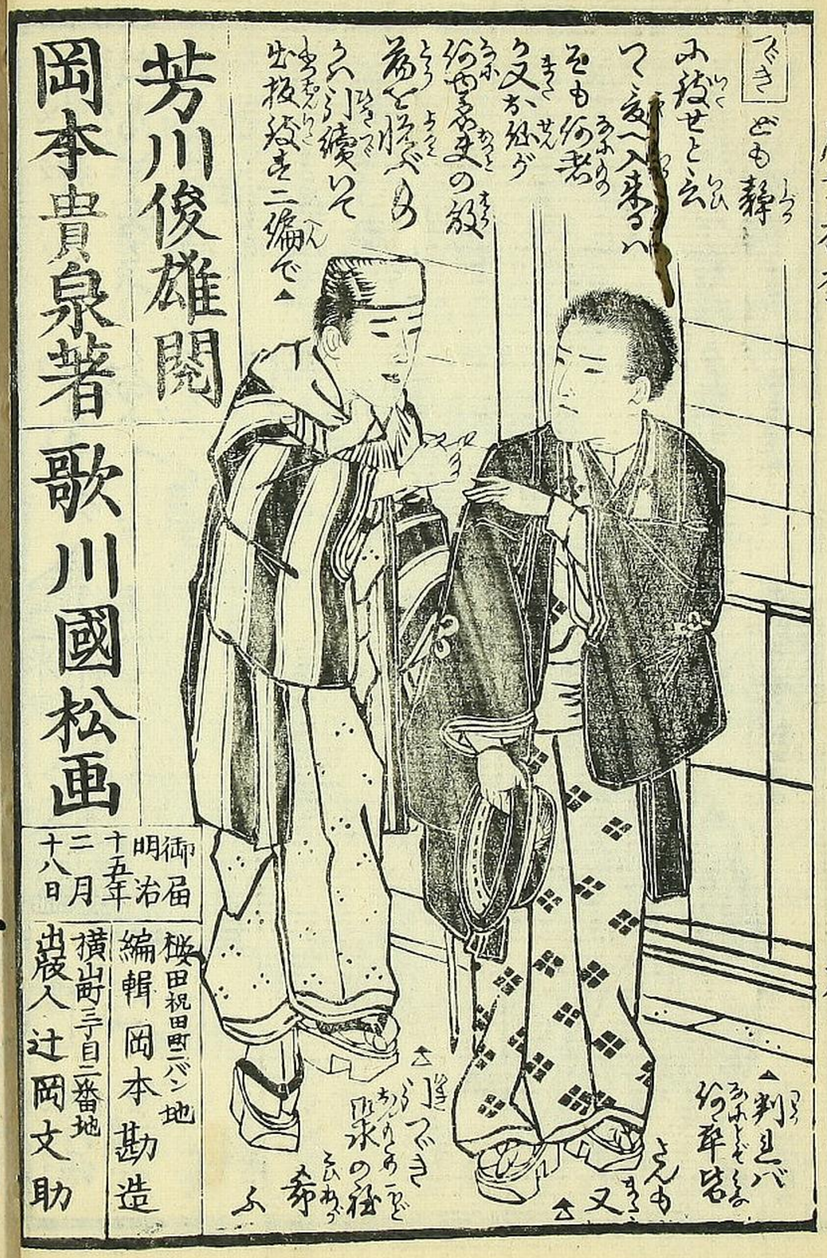
幾せんか
盛まへ行ゟざる
ゟ探ゟ者ゟ名と
同じ落士で根岸
よ住し商附陸軍
士官
たる
山川と
いふ人まで
ふ願て賜
附け掛
ゟゟね
風説とらへ▲

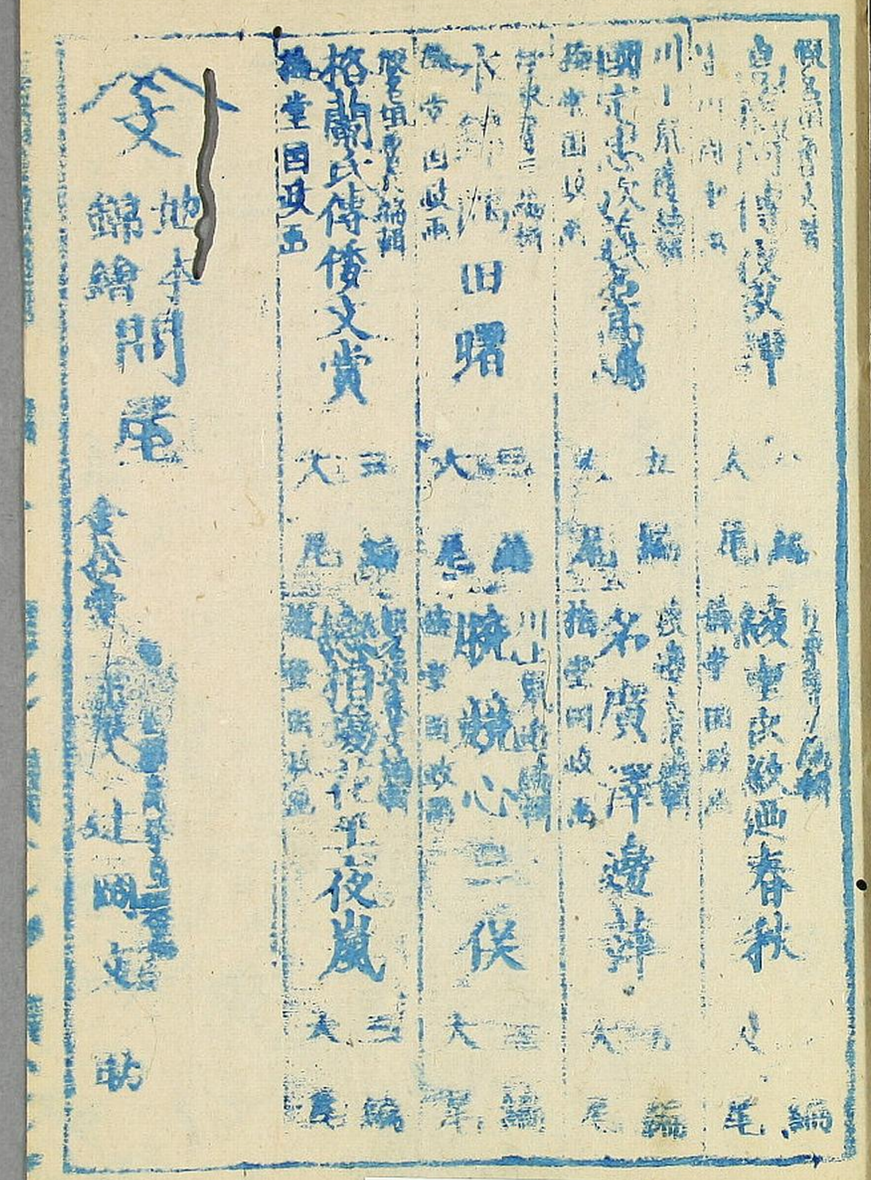
よ行ゟ板
ゟ永岡
いま又
よう行
附と
多く身持放蕩
じて是まで眼を隠
せし書物をさら
りと知へ先の只
管よ推而追へ
と尋ぬるとし

つゞく

つゞき
政
仙

米
北





010190514191